若手社会人たちの就職活動の回想

十人十色のライフ・キャリア・デザイン

自分らしい進路選択のために

ここまで、ライフ・キャリア・デザインの考え方を基に、進路選択（就職活動）において大事にしたいことを整理してきた。自分らしい進路選択は人生において大事なことである一方で、就職活動の時期・期間は限られている。その中でも、学生はそれぞれ自己の進路選択のために自分自身や社会のさまざまな働き方や働く組織を探索しながら、自分なりに「どう生き・どう働くか」を考えている。ここまでの整理を踏まえて、就職活動を経験したさまざまな若手社会人の振り返りに触れてみたい。

自己開示で深まる自己探索と会社への信頼

● Kさん　女性　社会人2年目

地元が好きで、将来は地方創生に関わりたいと考えています。そのため、自分の核になる経験・スキルを身に付けようと、東京での就職をメインに活動し、大学3年生の夏から数社の就業体験型インターンシップに参加。地方創生を題材にした会社の就業体験プログラムにも取り組み、やりたいことにマッチしていたものの、担当社員からは、すぐにできる仕事ではないと言われ志望度が下がりました。

最終選考には3社進み、一度視野を広げたいと考え、地方創生とは関係のない会社へ入社を決めました。正直なところ、業界自体に興味はありませんが、何度も面談で対話を重ね、自己分析を共にし、将来地方創生に関わりたいという私の意思を受け止めてもらえている安心感が、会社への信頼につながり、期待に応えたいという意欲になっています。

自分らしさを生かして何度でも挑戦を

● Oさん　男性　社会人1年目

就職活動では大学3年生の時、研究職へ5社エントリーし、機器メーカーに内定していました。一方で、かつてテレビで見た農林業の働き方が、自分の将来像に重なったこともあり、地方移住して農林業で暮らしていくことも捨てられませんでした。今まで自分で進路を決めたことがなかったので、社会人としての第一歩を自分の意思で決めようと、挑戦したい気持ちを優先し、農林業を選びました。

よその若者が地域に溶け込むために、地域の人に声をかけたり、夕ご飯を一緒に食べさせてもらったりと積極的に接することで、徐々に受け入れてもらえたと思います。ただ、仕事を始めて3カ月で大けがをしてしまい、完治に時間がかかるため、広告の企画営業へ転職しました。営業力という武器を身に付け、再び農林業にチャレンジしていきます。

既卒にも開かれていた社会の入り口

● Sさん　女性　社会人3年目

大学生で民間企業への就職活動はせず、地域や周りの人に役に立つ仕事がしたいと、公務員試験の勉強をしていました。1年目はいい結果につながらず、3年目まで挑戦しようと、卒業後はアルバイトを掛け持ちしながら勉強し続けました。結果、3年目まで縁がなく、民間への就職へ進路転換しました。

地域の安心・安全の観点から空き家問題に関心が高まり、空き家を賃貸物件として活用する企業を、就職エージェントに紹介してもらいました。就職活動をする前は、新卒採用のタイミングを逃したらブラック企業にしか就職できないイメージを持っていましたが、実際に選考に進むと誠意を持って対応してくださる企業がたくさんあることが分かりました。おかげで、面接を通して前向きに入社意思が固まりました。勉強してきたことを仕事に生かし、社会貢献できるのが楽しみです。

情報収集不足が対話の機会損失に

● Dさん　男性　社会人2年目

大学4年4月、就職活動と会計資格の勉強を同時進行しようと考えましたが、8月に資格試験に不安を感じ、就職活動に注力することに。多くの企業は新卒採用が終わっている現実に気づき、将来に暗雲が立ち込めていると実感しました。大学のキャリアセンター、就職エージェントなどに求人紹介してもらい、「デスクワークであればいい」という基準でIT企業を7社以上受け、内定を頂いた現職に入社しました。

仕事へのモチベーションは、高くも低くもありません。顧客とのコミュニケーションにストレスはあるものの、最低限の生活費は稼げているので特に不満もありません。ただ、何かを積み重ねられているという実感がないので、資格を取得して転職しようかと考えたりしますが、本音は、FIRE※して静かに暮らすことが理想です。

※FIREとは「Financial Independence（経済的自立），Retire Early（早期退職）」の頭文字で、端的にいえば「早期退職して、お金のために働く縛りから自分を解放する」というライフプランや概念

経験に基づくキャリア探索

● Mさん　男性　社会人5年目

高校生の頃から地元の活性化に取り組みたいと考えて大学を選び、1年生から長期休みごとにインターンシップに参加しました。知り合いに頼んだり直接社長さんに相談したりして、街づくりと接点がありそうな会社を7社ほど見ました。着目したのは、仕事内容よりも各社の経営理念が街づくりにどうつながるか、でした。

そこで見えたのは、一つの会社で地域課題を解決することの難しさでした。地域が持つさまざまな課題を解決するには、公務員が最適であろうと考え、地元の県庁に入職しました。

ただ、配属されたのは土木工事関連の部署。仕事のほとんどが行政手続業務で、地域の人たちと対話しながら課題解決をしていくような機会はありませんでした。このままでは街づくりの機会がなく、経験を積めないのではないか…。焦燥感にかられ、「街づくり」の観点で地元以外にも視野を広げると、さまざまな企業が見つかり、その一つに転職しました。心地よい街をつくる仕事にやりがいを感じています。

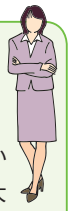
地元で地域活性化を目標にしていましたが、離れてみると地元への貢献の仕方はそれだけではないと気づきました。今思うと見たい部分しか見ないで進路を決めていたのかもしれません。

対話が生み出した、後悔のないキャリア

● Eさん　女性　社会人4年目

大学3年の夏、就職活動への熱意はなく、留学準備に勤しんでいましたが、たまたま参加した逆求人イベントで入社企業（A社）に出合いました。A社は他の企業と異なり、事業説明よりも私との対話の時間をじっくりと取ってくれました。インターンシップでは社員の方も学生に負けない熱量で向き合ってくれて、「この人たちと働きたい！」と強く思いました。10回以上面談を重ねる中で、自分の弱みも含めて理解してもらえ、最終選考へ進みました。しかし最終面接で気負って、それまで読んでいなかった面接対策マニュアルを参考に臨んだところ、不採用に。あきらめきれず、再度選考を頼んだところ、入社に至りました。

新卒配属は新規事業の立ち上げ部署に配属。希望したわけではありませんでしたが、いくらでも挑戦できる環境にやりがいを感じていました。しかし、入社から4年目に、スタートアップ企業に転職を決めました。4年間関わってきた新規事業が軌道に乗り、組織運営が安定的になる様を見て、自分は事業の立ち上げ期のような、試行錯誤する環境の方が好きなんだと気づいたためです。これは、私の特徴を考えての配属だったからこそ気づけたことでした。A社への入社は、私自身の自己成長にもつながったと思っています。



趣味と仕事の接点を期待して新卒入社

● Fさん　女性　社会人2年目

せっかく大学卒業したからには就職した方がいいという先輩や友人の意見に合わせて活動を始めました。大学3年3月から就職活動を始め、4年4月に2社内定が出たので終了しました。そのうち1社に、私が好きな野球に関連する部署があり、いつか野球に関わる仕事ができるかもしれないと思い、入社を決めました。

説明会では「営業はしない」と聞いていたはずが、配属先は個人向け営業の部署で、入社早々にモチベーションが低下。「遊ぶお金を稼ぐために働いている」と考えるようにすると、感情のブレがなくなり、仕事のストレスが気にならなくなりました。

思えば、選考を受けた全ての会社について、会社の事業の仕組みや仕事内容、キャリアステップなど聞いていませんでした。全く分からない状態で入社したので、想定外な現状もやむを得ません。もし当時に戻れるなら、事業内容をもっと調べて他の企業の選考を進めるかもしれません。

入社後ギャップを機に自分が重視したいことを考え直す

● Jさん　女性　社会人2年目

就職活動を始めた当初、膨大な情報の中から自分に合うものを探すのに困り、就職エージェントに相談しました。「人と直接関わる」「稼げる」を軸に企業を紹介いただき、中でもビジョンに共感できる会社の選考が順調に進みました。選考中の店舗営業の体験は、意思決定の後押しにもなりました。土日祝の仕事や出張が多い点が気になりましたが、最終選考前の企業との面談で懸念点は払しょくされ、入社を決めました。

入社1年目は希望通り営業として現場に立つことができました。しかし2年目、事業縮小で営業事務へ異動。顧客対応できない職場となり、やりがいがなくなりました。あらためて自分が何を望んでいるのか整理し「友人と休みを合わせたい」「長距離移動が続かない仕事がしたい」と思うようになりました。現在は、自分が希望する働き方を基に、エージェントと相談しながら転職活動をしています。